生涯学習令和５年度（２０２３年度）第２回豊中市総合教育会議　議事録

１．日時

令和５年（２０２３年）１２月１９日（火）　午前９時３０分～１０時３０分

２．場所

豊中市役所第二庁舎　３階大会議室

３．出席者

市　　長	長内　繁樹
教　育　長	岩元　義継
教育委員会委員（教育長職務代理者）	山野佳世子
教育委員会委員	赤尾　勝己
教育委員会委員	松本　裕美
教育委員会委員	黒田久美子

４．案件

（１）　個別最適な学びの実現に向けて

（２）　本市における今後の社会教育の進め方について

５．出席職員

都市経営部

部長	籔床　和弘
次長兼経営戦略課長	森田　宏人
経営戦略課長補佐	田中　絵里香
経営戦略課	松田　香帆
経営戦略課主幹(教育委員会事務局 教育総務課)	田上　淳也
経営戦略課副主幹(教育委員会事務局 教育総務課)	松村　有
経営戦略課主査(教育委員会事務局 教育総務課)	南　幸太
経営戦略課主査(教育委員会事務局 教育総務課)	外園　博人

教育委員会事務局

事務局長	長坂　吉忠
教育政策監	中尾　栄一
理事	藤原　二郎
次長兼社会教育課長	北村　宣雄
次長兼学校給食課長	勝井　隆文
次長兼教職員課長	森山　幸雄
参事	堤　昌子
社会教育課長補佐	荒井　啓子
社会教育課副主幹兼社会教育係長	島津　智子
学務保健課長	中積　崇
学校施設管理課長	桑田　篤志
読書振興課長	須藤　有美
読書振興課主幹	佐野　健二
読書振興課主幹	西口　光夫
教育センター所長	森　真理子
学校教育課長	田中　克嘉
児童生徒課長	井上　倫子
学び育ち支援課長	松本　光真
学び育ち支援課主幹	津田　晋
中央公民館長	弘中　伸明

６．議事

長内市長

・本日１つ目の案件「個別最適な学びの実現に向けて」、事務局より説明をお願いする。

森所長

・豊中市は「子育てしやすさＮＯ．１」をめざしますという資料１をご覧いただきたい。

・２ページ目、取組みの方向性の一点目は、パーソナライズ教育で学力アップということで、青い四角で囲んでいるＡＩドリルによるパーソナライズ教育、児童生徒に一人１台配備のタブレットにＡＩドリルを搭載していき、個別最適な学びを充実していく。

・３ページ目、ＡＩドリルやいろいろなアップデータを使って、授業改善や指導支援に生かしていけないかということで、ＡＩ分析による学習指導やデータ分析による進路指導などにも使っていけないか考えている。

・４ページ目、ＧＩＧＡスクール構想導入前は、今まで紙ドリルなどを使って、子どもたちは予習・復習をしていたが、ＧＩＧＡスクール構想の第１フェーズで令和２年度導入、一人１台タブレットと同時にデジタル系のものが入っていき、一部個別最適な学びの実現ができてきた。

・第２フェーズでＡＩドリルを導入し、更に個別最適化された問題が出題できるような学びの充実に向けて取り組んでいきたいと考えている。

・５ページ目、個別最適化したＡＩ機能には大きく２つあり、理解スピードの向上と定着ロスの最小化を狙っている。

・例えば、６ページ目、分数のたし算やわり算の問題をＡＩが解いたとき、Ａさんの解答、Ｂさんの解答、それぞれ誤答の違いは計算の順序がわかっていない、分数のわり算のやり方がわかっていないことが原因で、ＡＩが判断して、次に復習問題がＡさんとＢさんでは違う問題が出題されるというような理解度の定着を図るようなことを判断していくというものである。

・子どもたちに一度教えたものは時間がたてば一定期間忘れるので、繰り返し学習が必要であるが、それらの定着を習熟に合わせて繰り返し行っていくことで、ＡＩが個別最適な、いいタイミングで復習問題を出してくるので、その忘却時間をロスなくできるという効果がある。

・さらに定着の部分で言うと、１回当たりに時間を決めてスピード復習ができる機能もある。永遠に間違った問題をずっとやり続けていくと子どもも嫌になってくるので、一定期間、時間、例えば３分でも、５分でも時間設定を行うことで子どもが宿題

のやる気が出てきたり、復習の時間定着につながったりということで自己調整力の養成にもなると言われている。
・学習履歴と学び直しは、児童生徒がメインであるが、９ページ目は見える化したものである。自分の頑張ったところ、やりきったところ、間違ったところが画面で表示されたり、その問題をクリックすると、解き直すことができたりし、振り返りにもつながっていく。
・１０ページ目、先生の画面になるが、自分のクラスの子どもたちがドリルをどのようなところで間違ったのかということで、バツとついたところをクリックすると、子どもが間違った計算のやり方を確認することができるので、授業の中で、最初にこういう復習をしていこうというふうに、まず授業の導入から改善することもできるという機能になっている。
・１１ページ目、ワークブックでよく行うパターンであるが、先生方が一斉に同じプリントを子どもたちに配って丸つけをすることがある。これをＡＩドリルでやった場合、よく理解できている生徒、おおむね理解できている生徒、あまり理解できていない生徒によって、次に出てくる問題がかなり変わってくる。あまり理解できていない生徒については、ＡＩが判断して基礎的な問題をまず出してきて練習させていく。よく理解できている生徒には、少し難易度の高い復習問題が出てくるというように、自動で問題が配信されてくる。
・１２ページ目、そのＡＩドリルのタイムスケジュールであるが、令和６年度にはＡＩドリルを使った個別最適な学びを各学校で実施をしていき、令和７年度には、それらのデータを抽出したモデルケースの創出、令和８年度では市内全体でそのデータを活用した基盤構築をめざしていきたいと考えている。
・取組みの方向性の２点目が、パーソナライズ教育で学力アップの中の教育データサイエンス機能の強化である。１４ページ目見ていただくと、いじめや不登校の早期発見や、子どもの様々な事象への対応、経験年数の浅い先生への指導の補助的なものを考えている。
・１５ページ目、データサイエンス機能の強化を図るには、民間の事業者や、滋賀大学のデータサイエンス学部との連携なども考えており、どのようなデータ分析が必要になるのか、「誰一人取り残されない教育」具現化として、そのようなデータ分析を教員とともにやっていきたいと考えている。
・１６ページ目、いじめ・不登校事案の予測分析で、例えば不登校の子どもの欠席が実際に長期化する以前に何らかの兆候が見られるのではないか。経験や勘などでキャッチしていたものをデータから見ていく方法がないのかどうか。もちろん多忙化していく先生方ですので、働き方改革の一助になるようなものにならないのか考えている。

・１７ページ目、具体的に図で表すとこのようなものになるが、こども未来部でも子ども家庭支援システムという虐待やいじめ・不登校のシステムを持っているが、そのようなシステムとの連携、また学校でＡＩドリルを通じた学習状況のデータ、子どもの心のアンケート、また出席状況や保健室利用など、いろいろデータベース化し、ダッシュボードで可視化していく。それを学校にフィードバックしていき、指導改善に生かしてもらう。保護者や家庭には、可視化したもので、先生方が思って、日々感じておられるような子どもの状況を、プラスアルファデータでの返却を考えている。
・１８ページ目、ダッシュボードのイメージ案である。左上のところが学校のダッシュボードで、例えばバツやアラートがついているところ、この児童生徒１人であるが、このよう少し兆候が見られる、例えば学力が急に低下しているとか、少し休みがちになっているとか、遅刻が増えたとかということがアラートですぐ出てくるような画面が出てくる。同じように、学級ダッシュボードの中にもそのような機能があるが、個人のダッシュボードの右端ですが、子どもの個人ページということも考えており、子どもの学習状況や、心の中のつぶやきなどが、先生方が画面で確認ができるようなものになっている。
・１９ページは、ダッシュボードを使ったような、授業改善、学力向上のパッケージ案である。まずダッシュボードを使ったものを教員にフィードバックしていく。教員と、もちろん管理職や指導教員、学年主任もそれを見ているが、今でも若手の先生方には指導教員や学年主任、学年の先生方一緒に指導助言してもらっているが、補完するような形で、このダッシュボードを使って授業改善や指導の改善支援に生かせないかと考えている。
・またそれらを使いながら先生方のノウハウと、このダッシュボードを使った授業スタイルのパッケージ開発や、子どもの見取り方を学ぶとか、学習支援の引き出しを増やしていくということを計画している。
・最後、スケジュール案としては、令和６年度に生徒指導や校務データなど、教育データの蓄積を、令和７年はデータを用いたモデルケースの創出、最後には市内でデータの活用の基盤構築というところをめざして計画を進めようと考えている。

長内市長
・個別最適な学びの実現に向けて、大きなポイントとしては、ＡＩドリルによるパーソナライズ教育、教育データサイエンス機能の強化ということで、例えばドリルはこれまで紙を使っていたが、ＡＩドリルを導入することで、更に個別最適化された問題が出題できるようになる。大きな教育革命と言えるがご意見を伺いたい。

山野委員
・膨大な資料だが、教育や子どもに関わることに大変ご支援いただいていると感じており、ありがたく思う。まず市長にお礼を言いたい。
・教育委員会もいろいろ工夫して今の課題を分析している。膨大な資料の中から、何点かお伝えしたい。
・このエビデンスに基づく個人のダッシュボードもあり、先生も子どもたちも見える化できるので、本当に情報は取り入れやすいし、現状をしっかり分析しやすい。エビデンスに基づくことが非常にできやすいということを第一印象として持っている。
・ただ、エビデンスはあっても、ＡＩをどのように活用し、指導していくのかということのほうが私は大事であると思っており、情報はあっても使い切れないと、結局効果が生まれないと思っている。
・例えば学習面で言うと、授業でＡＩを活用していくことについては、かなり先生方も研究することや、扱い方をアドバイスしていただくことが必要なのではないかと思う。先生方が負担感を持たないようにすることが大事である。活用することで、客観的なデータに基づいて、最適な個人の学びにつながるような研修や、学校内での検討が必要であると思う。このようなことは、教員の負担を軽減するために考えていただいているので、負担感を感じることのないような運用になることを願っている。
・いろいろワークブックのＡＩ機能など使えば、授業中の活用や、家庭学習も個別にできると思うし、自分の段階に合った形で進むことができるので、そのような良い点を踏まえて進めてもらえればありがたいと思う。
・教員の指導力向上について、子どもの見取り方を学ぶと記載しているが、確かにそこから見えてくるものや、兆候は分かると思うが、現場にいた者からすればデータでは計り知れないものも多くある。そのようなことは一度も情報に上がってこない。個人がそれを出さなければ分からない。そのような見えないデータでは計り切れないものがあり、子どもの見取り方はやはり大変難しい。一定のエビデンスに基づいて、学校での研修会、検討会などを開いて、アンケートを取っていただけるのであれば、更に深い検討ができるとは思うが、ただデータだけでは計り知れないものがあるということを、教員がそのつもりで対応していかないと、大事なところを見落としてしまうのではないかと危惧している。

長内市長
・ＡＩドリルに関してだが、例えば、算数で最初は同じ問題を全ての子どもが解くが、次のステップでは生徒間で全然違う問題を解くということについては、教員として特に違和感はないか。

山野委員

・私は中学しか経験はないが、例えば、指導要領で決まった単元をここまで教えるというときに、積み重ねの教科であればあるほど、すぐに理解できる生徒、何とか理解できる生徒の差が非常に開き、分からない生徒が退屈してしまうという現実が教室の中ではあるので、ある程度全体の場で同じことを行った後、すぐにできた生徒は応用をする、少し理解不足の生徒については、最初から基本をするというような個別な対応については、全く違和感はない。

松本委員
・忘れかけた頃にもう一度復習するという、分かっていてもどのタイミングで入れていくのか個人では判断しにくいことを、ＡＩが助けてくれるというのはありがたいし、子どもの力を伸ばしていくのに大変役立つのではないかと思う。
・スポーツ界も根性論よりも、いろいろ科学的な分析をするようにシフトしていっているが、やはり学習面についても、そのようなことが必要であると感じていたので、いよいよ実現していくということで、大変期待感を持っている。
・先程の山野委員のご意見とも重なるが、頼り過ぎず、でも軽視せずという使い方が大変大事ではないかと思う。
・退職してしまう社員を早い段階でフォローできるようにということで、ＡＩを開発された会社があって、実験的に使うと、そのことでやる気が出てきたようではあったが、しばらくすると退職してしまったという話を聞いたことがある。表には見えないデータから分かってくるものもあれば、データに上がってこないけども経験のある先生から見れば分かるという両方の面がまだまだあると思う。頼り過ぎず、軽視せずという姿勢は必要であると思う。
・発展途上のシステムであると思うので、改善点があることを前提で使う必要があるのではないかと思う。
・子どもたちが軽い気持ちで他人のタブレットで学習すると、誤ったデータになってしまうので、指導する上で、自分のタブレットのＡＩドリルを使わないといけないという初歩的なところの指導が必要であると思う。大人がまさかしないだろうと思うようなことを子どもはしてしまう。
・セキュリティ面や残っていくデータの管理機関などの方針を決めていく必要があると思う。

長内市長
・ダッシュボードが何のことか分からないので、日本語で言い換えることができるのであれば何か考えてもらいたい。

黒田委員

・率直な保護者の意見としては、開始時期が気になっている。活用方法についてはこれから検討されると思うが、授業中、授業の合間、放課後、家庭学習とあるが、家庭学習では教える自信ないと不安になった。
・できないところにバツがつくが、丸ばかりの子どもは短時間で終わっていいが、できない子どもを想像したときに、何か工夫できないかと思う。例えば、バツばかりで幾ら学習しても、復習、復習と出てきたりして全く終わらないと疲れるだろうし、何かバツがつくときに何か見せ方の工夫ができればいいのではないかと思う。
・不登校の子どもについて、客観的に見ていて、ＡＩドリルでは兆候が見えるのかどうか、イメージができない。
・人間の心はアナログの方が響くということも感じることもあるので、上手な活用を期待している。

長内市長
・確かにデータで兆候はつかめるかもしれないが、最後に動かすのは人でしょう。そのあたりはＡＩドリルの中で反映できるようにしていくといい。
・計算は分かりやすいと思うが、国語もＡＩを活用することができるのか。

森教育センター所長
・国語については、ＡＩが効いたような機能はまだ出来上がってないと聞いている。

長内市長
・ＡＩに教えてもらうと、間違いを教えられるかも知れないという危惧が少しある。
・算数、数学の面で言えば、例えば正答率からどのような傾向の問題を出していけば早く理解できるのかなどというようなことを考え、ＡＩ自身が進化することもできるのか。

森教育センター所長
・そのとおりである。

赤尾委員
・この資料を拝見して大変感動している。まさに２１世紀の学校教育の姿が表れていると言ってもいいと思う。この人工知能、ＡＩドリルによるパーソナライズ教育を推進していっていただきたいと思っている。
・ＡＩによる支援によって、機械任せにはできないと思う。やはり分からない子どもに対して、先生はどのように接していくのか。子どもたちへのケアはきちんと行う必要があるのではないかと思う。誰一人取り残さないという観点を忘れてはならない。

・子ども同士で学び合う、教え合うという関係性について、学校という一斉の集団の学習支援の場ですから、子ども同士の共同性であるとか、そのようなものに基づいた教え合い、学び合いのような関係性が損なわれないようにしてほしいとい感じている。
・データをどこに保存していくのか、どういう形で処理し、処分していくのか、しっかり管理する必要があるのではないか。
・ＡＩドリルに乗りやすいコンテンツと、乗りにくいコンテンツがあるのは言うまでもないと思う。やはりその算数、数学のような教科であればＡＩを活用しやすいが、国語などは情意的なものが入ってくるので少し活用しにくいのかと感じる。そのあたりは今後開発できるのか、期待したいと思う。

岩元教育長
・学校においては、クラスでの授業がベースになってくるので、基本的に集団的な学びをやる場であると思う。その中で個別最適な学びを進めるということはかなり難しいとは思っている。
・個別最適な学びはこれまでも全く行っていないことはなく、例えば算数の少人数学級などの授業で、一人ひとりに手厚い学びを届けるということはこれまでも行っている。ただ、それが十分かと言われれば、そのことで個別最適な学びができていますというところにまでは、到達してないと思う。
・ＡＩドリルが個別最適な学びに向けた大きな武器になることは間違いないと思っているが、授業も、このＡＩドリルを最大限活用するような組立てがあると思うし、家庭学習、宿題の出し方にしても、それを活用していく中での仕様に変えていく必要性があるので、進め方について、校内での研究なり研修は非常に重要であると思う。
・ただ、ＡＩドリルの活用でこれまで見えなかった部分が見えてくるということは絶対あると思う。だからといって、先生がＡＩドリルばかりに頼ってしまってもいけないので、これまで見てきた先生としての知見、あるいは子どもの表情を見て感じることはやはり大事で、補完する役割としてＡＩドリルは位置づけて対応していくということが重要であるのではないか思う。

長内市長
・ＡＩドリルの使用は、令和６年度からか。

森教育センター所長
・令和６年度から順次一部導入していき、令和７年度には全校導入となる。

長内市長
・令和６年度からまず一部で始めて、令和７年度にはもう普遍化する。
・全員に届くときには、本日いただいたような意見もしっかりと反映されるようにしていけたらと思う。
・一つ目の案件「個別最適な学びの実現に向けて」、ほかに何かあればご意見をお聞かせいただきたい。

赤尾委員
・私は中学校時代に英語の学習をするときに、プログラム学習書というものを活用していたが、そのような観点から見ると、数学の次は英語ではないかと感じている。

山野委員
・国語と同じで、英語も表現するときにそれで本当にマッチしているのかどうかというのは、ＡＩが言ったことが、自分の伝えたいことと同じなのかというのは国語の話を聞いて若干不安に思った。やはり使い方なのではないかと思う。

長内市長
・表現でなく、文法であれば英語でも使えると思う。
・可能性を秘めていることであるので、まず来年度から始めて頑張っていけたらと思う。
・本日２つ目の案件「本市における今後の社会教育の進め方について」、事務局より説明をお願いする。

北村次長兼社会教育課長
・「本市における今後の社会教育の進め方について」ご説明させていただく。資料２をご覧願いたい。
・１枚目「豊中市の社会教育のあり方検討【概要版】は、豊中市社会教育委員会議で今年６月にご提言いただき、まとまった内容である。経過と現状などいろいろこれまでのことを分析しながら、今後どうすべきなのかということを検討してまとめている。
・左下は、本市社会教育のめざすべき方向性で、基本コンセプトと方針を挙げている。「わくわく学びつながり育つまち豊中」といった基本コンセプトを掲げさせていただいている。その下は「豊中市の社会教育＝地域づくりの根幹を支える人が育つ」ということで、社会教育は人づくりが大事なところではないかと考えている。
・まとめたこれらに基づいて、具体的にどういう仕組みで進めていくのか２ページ以降で説明させていただく。

・２ページ目は、社会教育行政機関の役割と取組みということで２点挙げている。
・１点目は、社会体育、文化振興、地域コミュニティなど、様々な分野と社会教育の連携をしていくというようなことを書かせていただいている。
・２点目は、その実現のために社会教育主事を配置し、調整やコーディネートをしていくということを書かせていただいている。
・３ページ目は、具体的にこのような仕組みで人材育成をしていきたいという概念図を表させていただいたものである。
・左側に社会教育施設という四角囲みで書かれているところがある。「地域課題に対応した連続講座」、「連続講座を通した仲間づくり」と書いてあり、公民館、図書館などが社会教育施設の代表的なものとして当たるが、その公民館などで、個人的な学びから始めて、それを仲間づくりなどで共に学ぶという組織的な学びにつないでいくというような動きを取りながら、右側のところに子育て、環境、福祉などが並べて書いているが、教育委員会以外にも市長部局で様々な分野があるが、そのような分野でもいろいろと地域活動を現在されておられるので、そのような様々な子育てをはじめとした行政課題の分野の地域活動のところにつなげていきながら、それが右側に書かれている各分野の地域活動ということで継続的な地域活動へとつながっていくというような流れで人材育成を考えている。そういう全体の流れの中で特に左側の最初の人を育てていくというところに主に社会教育が関わっていけたらと考えている。
・社会教育施設の上に、社会教育主事と書いているが、先ほども社会教育主事が調整とかコーディネートをしていくと申し上げたが、そういう連続講座の企画立案や、子育てをはじめとした各分野へのつなぎというようなところに社会教育主事が積極的に関わっていき、つないでいくというような役割を果たして進めていけたらと思う。
・各分野でつなげていくときに、団体活動の立ち上げを支援ということで、各分野で様々な活動のための助成金等を用意しているものもあるので、そういったものも活用しながら活動につなげていけるような調整をしていけたらと考えている。
・社会教育施設と書かれた枠の中に、図書館と公民館を示し、重なり合うような表現をさせていただいているが、本市において特に、これまでももちろん図書館、公民館は連携した事業を実際行ってはいるが、今後これまで以上に一体的に連携しながら、社会教育を進めていけたらと考えており、連携して進めることによって、人と地域と情報をつなぐというようなことの役割を果たしていけないかと考えている。
・４ページ目は、社会教育施設で図書館、公民館、郷土資料館、青少年交流文化館いぶき以外もあるが、そのような社会教育施設でも、もちろんそれぞれの分野での学びの提供、人材育成は進めていきたいということを表させていただいている。
・５ページ目は、一方で社会教育は市民主体で進んでいく社会活動という面もあるということを表している。現在、本市においても、ここに書かれているような、市民主体の社会教育活動があるので、当然引き続き継続して進めていきたいと考えている。

・６ページ目は、人材を育成していくときに、やはり地域の人材の循環のしかけといというような仕組みが必要なのかと考えている。
・先ほども説明したが、学びの連続講座というのは、公民館等で実施した学びというところから始まって、それを持続可能な活動につなげるということで継続的な場の提供を行っていきながら、地域活動のスタートということで、地域活動、様々な分野での地域活動等へつなげていって、地域活動をスタートしていきながら、助成金などを使って継続的な活動、地域活動につなげていく。活動していた人たちも、また、講師などで迎えながら、学びをまたやりながら、循環していくようなしかけをつくっていけないかと考えている。
・本日は、このような進め方についてのご意見と、少し難しいかも知れないが、進めていったことに対しての評価はどのような形でもできるのかというような面からのご意見があればいただけたらと思う。

長内市長
・２つ目の案件について、ご意見を伺いたい。

赤尾委員
・先ほど学校教育分野で、かなり先進的な話を聞いたので、社会教育の推進の話を聞いていると、もう少し何か斬新なものがあってもいいのではないかと思った。
・ＡＩドリルとまでは言わないが、同じようなものを使ったパーソナライズされた学習支援のようなことはできないのだろうか考えてみる必要があるのではないかと思う。
・私は現在、大阪市社会教育委員会議の議長である。大阪市の第４次生涯学習大阪計画の中に誰一人取り残さない生涯学習支援ということで、ＩＣＴを活用した学びを支援すると記載されている。そのような計画も少し参考にしながら、斬新なものを一つ入れていただきたいと思う。どうしても公民館に人を集めて講座を開催するなどという方法からなかなか抜け出せない。もちろんそれが主流であることはいいのだが、その中に個々に対する個別最適な学びみたいなものがあってもいいのではないかと思った。
・例えば、社会教育のところで本当に重要なのは、社会的に不利益を被っている人たちへの学習支援であると思う。例えば外国人、障害者、高齢者など、なかなか学習に行きたくても行けない方たちを誰一人取り残さないということが必要であるのではないかと思った。外国人における日本語の学び直しソフトなどが開発できるのであればいいのではないかと思っている。

・市長部局との連携は総合行政的で文部科学省自身もその方向性である。なお一層、市長部局との連携を進めていただきたい。難しいのかもしれないが、予算の関係などは、市長とともに考えていただきたい。

長内市長
・一番根幹となる大切なポイントのご指摘ありがとうございます。

岩元教育長
・学校教育以外は全て社会教育と言われているということで、大変幅広く、また主体も市役所が実施するもの、市民のもの、学び合うもの、あるいは大学が実施しているものと様々ある。その中で全体を統括するマネジメントはそもそも難しいと思っているが、連携することで、もう少し、より効果的な学びにつながるということを模索していくべきであると思う。
・これまでも教育委員会内は連携しているが、もっと密度を濃くすることはできるし、教育委員会と市長部局の連携という意味で言うと、中学校の部活動の地域移行という課題に向けて取り組んでいるが、学校の部活動を学校教育から社会教育に移そうという流れであると思っている。現在、市長部局のスポーツ振興課と教育委員会が連携しながらその体制づくりに取り組んでいるということが、一つの大きな動きなのかと思う。そのような明確な目的があると、それに向かって連携していくということは具体的に動きやすい部分もあるのではないかと思う。
・社会教育のあり方検討の中で示しているのが、市民主体の学びというときには、やはり人材確保であり、地域人材の後継者がなかなかいないというところが、社会教育分野に限らず、様々な地域活動においては非常に大きなネックになってしまっているということがあると思うので、どのように働きかけていくのかということが大変重要であると思うし、これまでの講座の参加を一つのきっかけにして関わっていってもらうというようなことも柱としては重要ではないかということも感じている。ＡＩということではないが、ＩＣＴの活用をして、少し広がりを持たせていくというような視点も大事ではないかと思っている。

長内市長
・社会教育は本当に広い分野であり、トータルの議論が必要である。ただやはり、社会的不利益を被っている人の学び直し、あるいはそのような人の生涯教育を我々がしっかりと行うということを、社会教育の推進の中で大きく念頭に置いておかないといけない。

黒田委員

・何がその人のきっかけになるかは分からないが、多くの様々なコンテンツがあるほうがいいと思っている。分野の広い社会教育の可能性を感じていて、やはり行政だけでは多くのことはできないので、市民活動で一緒に連携していくという重要性も感じている。私も市民活動をしていて、団体を立ち上げるというときに支援があったが、継続することが周りを見てもとにかく難しいと思っているし、必要な人に必要な情報が届くサポートは行政にお願いしたいところである。
・社会教育に関わっていくきっかけとなることで、豊中市の強みであると私が思っていることは、赤ちゃん訪問とブックスタートである。ほかの市よりも訪問率が高いと聞いた。そこで、ほかの人との出会いや、地域のことを知る、いいきっかけになると思うので、そのことを強みとして、そこで何かいい情報を得て、いいつながりになればいいと思う。
・評価が難しいと思っていて、池田市の子育て支援施設に子どもたちの足の測定などに行くことがあるが、数字で評価されると現場の方たちは悩んでいた。何人集めるかで評価されるから、大勢の人が集まる先生を呼びたいということになると言っていた。

松本委員
・本当に社会教育の分野は範囲が広いので、何もかも市でというのは無理だと思う。何かしたい、調べたいというとき、今はインターネットから情報を入れる方が多いと思うが、信憑性のある情報は公共の市、区などから入ってくる。何らかの事情ですぐには施設には行けないが、情報が欲しい、何かしたいことがあるというときの導入がインターネットであり、そこで信頼性のある市の情報をいただいてから出かけていくという、何もかも市ではなく、ほかの組織でも紹介していただけるなら、公平性など、きっかけになるハブ的なところというイメージを持っていもらえば、より広がりやすいと思う。
・私もまだ考えつかないところではあるが、評価はなかなか難しいと思って、実感として漠然としているが、市につながったら自分の最終的につながりたいところにつながるという信頼感、安心感を市民の方から持ってもらえるというのが、めざすべき評価なのかと漠然ではあるが思う。

長内市長
・本来であれば、評価のことは自ら考えて問いかけるものでもあるので、あまり気にしないでください。

山野委員

・私自身が以前大阪府教育委員会で、社会教育の分野に携わってきて、社会教育主事講習も受け資格を取ったので、課題は私が携わっていた２０年程前と変わらないが、やはり生涯学習は大事な部分であると思っている。
・コーディネートすることは大変難しいと思うので、連携というところが一つのキーワードであると思っている。
・私が大阪府全体を回っていて、講習などにいろいろ関わらせていただき、その後、豊中市の勤務に戻ったときにやはり公民分館は大規模であると思った。大阪府内でも、公民館までは行けないが、公民分館であれば地域にあるので、割と行きやすいという意味でも少しきっかけにはなりやすいのではないかと思っている。
・人材のしかけということで言えば、私が教育委員会に勤務しているとき、自分が教員であったということもあると思うが、教育コミュニティづくりをしていくと、地域の方も子どもたちのことは絶対大事にし、応援しようと思ってくださるので、これが教育コミュニティづくりであると思い、仕事で提言を書いたこともあった。
・実感としてＰＴＡから始まることが多い。任意団体であり、加入する、しないなどの議論もあって、私が大阪府のＰＴＡ連絡協議会を担当していたときも様々な意見があって、学校現場に戻ってきたときに地域を見ると、つながりがＰＴＡから始まっている方が非常に多く、そのグループがいろいろな形で場所を変えて活動されている事例があって、そこが地域の団体とのつながりの最初になる。その核となる人材の育成や継続することについては、ＰＴＡの方であれば若い世代が入ってこられるので、うまく引き継ぎされている団体もあって、連携できたらいいのではないかと思った。ただやはりマネジメントは行政が行うのがいいと思う。
・２０年程前に教育基本法に家庭教育が明記されたことには、大きな衝撃を受けた。家庭には入っていけないのに、これはなかなか難しいと思った。赤ちゃん訪問やブックスタートはいいものであると私も思っているが、当時私が福祉の保育関係の方と一緒に地域を回ったときに、公園に出かけると、本当に行き場のない方、保育園にも入れない、就労されていないから保育所に入れない子どもの保護者に保育士が声をかける。今の若い方で出向けない方は、ＳＮＳでつながれる方法があるのではないかと思う。
・家庭教育支援も気になっていて、学校につながっていくので、幼保、小、中、高と進んでいくうちに、小さいときのお母さんとの関わりは後々かなり影響を及ぼすし、育児でもう手一杯の方がたくさんいらっしゃるが、どこに助けてもらったらいいのかが分からないという現実を目の当たりにしたので、もう少し福祉関係の方や医療関係の方とも連携して、推し進めてもらいたいと思う。
・評価については、私もアンケートくらいしか思いつかず、ＩＣＴを使うといいのかとは思うが、感想があれば書いてくださいと言うと、面倒くさいから絶対に書かな

い。感想の例を挙げて、どれか１個押すというような形にすることも一つの方法であると思う。

長内市長
・やはり各委員それぞれ見る視点が違うということがよく分かった。この社会教育の進め方については、１回の議論で済むような話でもないし、次のステップに向けて、いただいたご意見をしっかりと盛り込んでいき、また、一緒に議論させていただけたらと思う。
・案件は以上だが、インフルエンザの状況が分かれば聞いておきたい。

長坂教育委員会事務局長
・１１月２０日～２６日の週で、いわゆる定点当たり１６．９３まで来ている。１１月～１２月３日の週で１４．５４と少し下がっている。
・学級休業については、１カ月程で、小学校３６校、中学校１２校、義務教育１校の４９校で、学年休業が２校となっている。

長内市長
・もうすぐ冬休みに入るので、学校で一旦収まればいいが、今度は家庭で蔓延するかも知れない。全国的に言えば、定点観測で３０超えてるところもあるので、皆様方も気をつけていただけたらと思う。
・次の開催日程についてはどうか。

事務局
・年度末の３月の予定にしているが、日程調整等諮らせていただくのでよろしくお願いする。

長内市長
・３月に次の総合教育会議を開催したいと思う。
・今日は本当にお忙しい中ご出席いただき、多くの貴重なご意見いただいて心から感謝申し上げる。
・以上で、第２回の豊中市総合教育会議を終了する。